

# 九州対外交渉史研究

地域交渉史研究チーム（課題番号：147001）

研究期間：平成 26 年 7 月 29 日～平成 29 年 3 月 31 日

研究代表者：武末純一 研究員：星乃治彦

## 1. 研究成果

以下のような研究成果が上がり、武末を研究代表者とする科学研究費 基盤研究（A）「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」（2017年度～2019年度）と、星乃を研究代表者とする科学研究費 基盤研究（C）「戦間期ベルリンにおける〈共〉とクィアの交錯—M.ヒルシェフェルトを中心に—」（2014年度～2016年度）がともに採択された。

### (1) 弥生・古墳時代の対外交渉

武末は弥生・古墳時代の九州と朝鮮半島の対外交渉を中心に検討した。日本列島の楽浪系土器や弥生時代での文字と中国銭貨の使用、古墳時代の渡来人が主なテーマであった。

#### 1) 弥生時代での文字の使用

弥生時代後半期には、ツクシ政権内部で伊都国と奴国が台頭してほかの国々の上に立ち、王が現れる。また、中期後半の各国の王墓を含めた首長層墓の副葬品は、前漢鏡やガラス璧などの中国系が主流になる。ツクシ政権の首長層の権威の拠る所が古朝鮮から前漢に変化し、後期には後漢に引き継がれた。その他の諸国で前漢鏡を持つ中心主体も王墓でよい。それらのうち一支国の原の辻遺跡は大川地区を中心に前漢～後漢の中国鏡が出土するから、後半期にも国邑の座を維持した。

弥生時代には漁村と山村ができ、漁村の中からは海上交易活動を主体とする海村も現れた。海村や漁村・山村を抽出する目安は、石庖丁の数量である。福岡県糸島市御床松原遺跡は漁具が卓越し、石庖丁の数量(12点)は、同時期の農村である佐賀県鳥栖市安永田遺跡の石庖丁の数量(63点)のおよそ5分の1で、農作業の比率もその程度であった。したがって、御床松原遺跡のように、周囲の遺跡よりも漁具の比率が高くて海上交易品が出る沿岸部の漁村は、海村と見てよい。地理環境や『魏志』倭

人伝の「南北市糶」の記述から見て海上交易活動の比率が高い対馬でも、これまで石庖丁はほとんどなく、島全体が海村で占められた。壱岐では原の辻遺跡とカラカミ遺跡が代表例である。これらの海村は原の辻遺跡を除いて、国邑よりもはるかに小さい。

弥生時代の文字使用の本格的な考古学研究は、弥生中期後半併行の韓国慶尚南道昌原市茶戸里1号墓から出た5点の筆を筆記用とする李健茂氏の論が契機で、中国銭貨、楽浪土器、天秤権や棹秤権を検討してきた。

かつて私は、日本列島の楽浪土器を、1遺跡に1～2点程度の対馬型、3点以上だが遺跡全体に散漫に分布する原の辻型、遺跡内の一区画に集中する三雲番上型の三つに分けた。対馬は韓半島南部と日常的に交流し、対外交渉の基層をなした。原の辻遺跡では中期後半から古墳時代前期前半まで楽浪土器の流入が継続する。炊事用の滑石混入土器が一定量みられるから、楽浪人の滞在が考えられる。原の辻型は海村の一つの特徴で、海村世界での交易は対外交渉の中層をなす。番上型では伊都国の国邑中央部の狭い範囲から集中出土しセットがそろってから、ツクシ政権の対外交渉での最上層の様相と楽浪人の居住を示す。楽浪土器は、対馬島を除けば、もっぱら日常生活域から出土する。国邑で完形中国鏡が首長層の墓に副葬されるのとは著しい対照をなし、取り扱いが異なる。楽浪土器のうち、半球形の鉢は、Ⅰ類の勒島遺跡例から変化し、Ⅱ類は丈が高くなって底部が小さく、内面には縦方向の直線的な暗文を全面に施す。Ⅲ類は日本列島で最も多くみられ、Ⅱ類より口が小さくなるため底部の比率がかなり大きくなる。口縁断面は三角形、内面の暗文は集線となり、原の辻遺跡でも、このⅢ類が多い。弥生時代終末期～古墳時代初頭のⅣ類は小型化して直口もあり、帯方郡の土器の可能性がある。

半兩銭、五銖銭、貨泉などの中国銭貨は、海村の生活域から4点以上が出る。ほかに海辺の岡山県高塚遺跡で

貨泉25点、大阪府亀井遺跡で貨泉4点が知られた。国邑級の集落では、完形中国鏡の場合と異なり、中国銭貨をほとんど保有しない。海村の中国銭貨は生活域から出て生業に関わるから、海上交易活動での対価に用いられた。中国銭貨の弥生青銅器原料説も根強いが、多数の鋳型や鋳造関連資料が出た須玖・唐古・鍵・比恵・那珂では中国銭貨はほとんど出ない。日常生活域での確実な祭祀埋納例もほとんどない。後漢の五銖銭が中国や楽浪では流通するのに、日本にあまりないことを問題視する意見もあるが、韓半島南部も貨泉が卓越し、日本列島だけの現象ではない。最近では、中国本土での後漢の銭貨も、墳墓では後漢の五銖銭が多いが、穴蔵に埋蔵した窖蔵銭は貨泉が主体で、貨泉の価値が下落したために窖蔵された貨泉は中国本土で使われず、韓半島南部から日本列島へ流入したとされる。

山口県沖ノ山の甕の模造品での実験では、中国銭貨を痕跡の上面まで満たすには500枚以上必要との結論が得られた。韓国でも全羅南道海岸部の巨文島では980枚が採集され、仁川市雲北洞遺跡では五銖銭18点が紐に通した状態で出た。光州市伏龍洞遺跡2区域1号土壙墓でも、貨泉50余点が紐に通した緡銭の状態で出た。中世の銭貨流通の研究では、個別発見貨が目され、流通の度合いは、もっとも盛んなレベルⅠ、一定量流通するが限定的なレベルⅡ、ほとんど流通しないレベルⅢの地域に分ける。日韓の中国銭貨はレベルⅡに相当し、レベルⅡの地域で中国銭貨は他の用途にも使われた。

同じ中国製品でも中国鏡の場合は、完形品が国邑に集中し、海村では破鏡である。国邑は政治権力で国の中の周縁にある海村を制御するが、各地域の海村は、独自の世界を形成して、交易活動では逆に国邑を制御した。原の辻遺跡は、国邑と海村の二つの性格を併せ持つ特異な遺跡である。

原の辻で出た青銅製の棹秤権は、弥生時代後期に属する可能性が高いとされた。青谷上寺地遺跡の銅鐸形石製品と報告された3点も石製棹秤権である。亀井遺跡の石製天秤権は11点で、2の累乗倍の重さを持ち、本来は2組であった。佐賀県鳥栖市本行遺跡Ⅱ区65号土坑では、後期前半が主体の土器群と共に、亀井遺跡と同様なつくりの石権が2点出た。亀井遺跡の天秤権は4点の貨泉と関連する可能性がある。北部九州の棹秤権は他にも類例があって、石製・土製ともに吊り下げ部分だけでなく、鈕と体部の縦横にも紐ズレ痕が残り、破損防止のために紐で縛った。権は海村だけでなく、拠点集落での計量にも使用されたが、交易の場での使用頻度が高いと考える。

漢代の墨は顆粒状で、板状の石硯の上に置いて上から小さな正方形の板石(研石)で磨り潰す。ここでは各遺跡から出た石硯や研石を、各遺跡名を付けて〇〇硯と呼ぶ。番上硯は、三雲・井原遺跡番上地区の土器溜りの最上層(黒褐土層)から2015年12月2日に出た。時期は弥

生時代後期末以前である。金雲母様の粒子を含んで層理がある黒灰色の砂質頁岩製の破片で、側面は一部分のみ残る。現存長6.0cm、現存幅4.3cm、厚さ0.6cmで上面はよく研磨され、下面は割ったままである。側面は上半部が上面側に内傾して下半部は垂長に近く、別々に横研磨する。番上硯と比較対照した資料は、鳥根県松江市の田和山硯、楽浪王肝墓硯、東京国立博物館小倉コレクションの(伝)楽浪硯と勒島硯である。楽浪で使用された石硯・研石自体のつくりには以下の特徴がある。

- ① 石材は層理がある砂質頁岩とみられ、金雲母様の粒子を多く含み、黒灰色。
- ② 石硯は長方形板状で、上面は研磨して平滑だが、下面は割ったままで研磨しない。  
研石も板状の場合、下面は平滑だが上面は粗雑である。
- ③ 側面は、扁平な板石を半分擦り切って割り取るため、原則的に上下面に垂直ではなく、どちらかの面に内傾し、横研磨が2回みられ、時に破面がそのまま残る。

番上硯は、そこに居住した渡来楽浪人が文書を作成し外交交渉に携わったという推測を裏付ける。また、日韓の海村で交易に文字使用した可能性が高まった。

現在、韓半島の弥生系土器は泗川圏域と金海圏域、蔚山圏域の3地域に主に分布する。泗川圏域の勒島遺跡は対外交渉の重要な結節点で、中国東北地域や楽浪郡の交易網とも結びつき、石硯や石製・鉄製の棹秤権もある。ただし、韓半島での弥生社会との交渉の中心は、一貫して金海地域であった。昌原茶戸里遺跡や金海良洞里遺跡の原三国時代の土器や鉄器は、壱岐・対馬や北部九州を中心に西日本で出る弥生時代後半期(弥生中期後半から後期)の韓半島系の土器・鉄器と共通する。

弥生時代の韓半島と日本列島の相互交渉の目的の一つは、「弁辰の鉄」であった。それは日本列島側だけの都合ではなく、韓半島南部の販路拡大戦略の一環でもあった。

## 2) 古墳時代の渡来人

古墳時代の渡来人は、これまで古墳の出土品で語る傾向が強かった。しかし、古墳の出土品は、さまざまな脈絡の果てにそこに副葬あるいは奉納される。また、古墳は墓であり、我々の経験からも、人の死に際しては日常生活の諸関係とは異なる関係が立ち現れる。福岡県沖ノ島の古墳時代祭祀遺跡では、古墳出土品と共通する朝鮮半島系の渡来系金属遺物が多数出るが、朝鮮半島系の土器はほとんど無く、渡来人が主宰した祭祀の島とは誰も言わない。この沖ノ島の4～5世紀の遺物組成は古墳出土品と同じで、葬祭未分化の時期とされる。沖ノ島の渡来系遺物で渡来人を語るのは困難だから、古墳出土遺物で渡来人を語るには、遺構のつくりや遺物の出土状況を加味した検討が必要になる。

したがって、渡来人集団をより直接的に捉えるには、日常生活の痕跡そのものである集落出土渡来系資料を検討の中心に据え、古墳研究偏重の現状を打破する必要がある。

ある地域での他地域の資料を摘出する原則を、とくに遺物について筆者は、

- ① 出現の時点で、それまでなかった形とつくりをもつ（不連続）。
- ② 出現の時点でどこにでもはなく（非普遍）、各遺跡での比率も一定しない（不安定）。
- ③ 逆に故地では、各遺跡での比率が一定し（安定）、どこにでもあり（普遍）、形やつくりがその前から続く（連続）。
- ④ 他の考古資料からも矛盾しない。

と考えた。こうして摘出された渡来系遺物のうち、特に酸化焰焼成の炊事用土器（古墳時代では朝鮮三国系の軟質（系）土器であり、韓式土器や赤焼土器とも呼ばれる。以下、搬入・忠実再現品は軟質土器、変容品は擬軟質土器とし、あわせて軟質系土器と総称する。）の研究を進める必要があり、そこで渡来人集団を捉えた上で、墳墓研究と結合するべきである。

これまで集落出土渡来系遺物の研究は、その有無や、もっとも捉えやすい搬入品・忠実再現品の検討に偏っていた。しかし、以下の点に及ぶ必要がある。

1. 集落の中で、どんな施設や場から出るかを検討する。
2. もっと積極的に変容品を活用し、その変化相を把握する。他人の空似を誤認する危険性もあるが、渡来人集団と地域社会の関わりや、地域社会の変化の把握に必要である。
3. 漠然とした中国大陆や朝鮮半島ではなく、その中のどの地域かを追究し、故地との関わりを把握する。

さらに、渡来系の遺物や遺構が出る集落も一様ではなく、時期や地域から、いくつかに類型化できる。そして、同時期でしかも渡来系の遺物や遺構を持たない集落との対比を常に心がけたい。

渡来系の文化や要素は、その定着や普及にいつも成功はせずに失敗する場合も多い。集落レベルでは定着するが、地域レベルでは普及に失敗する場合もあろう。ただし、失敗しても在地社会がわずかに変化するときもある。

私たちは、渡来人が来たらすぐに技術が移転して広がり盛行すると考えがちだが、ときに時間差もみられ、「渡来人の定着によるその地域と故地との交流回路の開通と維持」を考えたい。また、渡来は最初の一時点だけとは限らない。

地域が多軸性、重層性、多様性をもつように、地域空間の一部をなす集落も、その中がさらにいくつかの区域に分かれ（重層性）、それぞれが異なる機能を果たす（多様性）場合があり、また、渡来人の集団的な居住集落で

も、故地とは異なる幾つかの地域とのつながりが同時にある（多軸性）。

最後に、出土した資料は調査地点の偏りなど不均質な場合が多い。また、発掘資料が全てではない。失われた資料や未調査部の程度と、集落の範囲を常に考えたい。

**北部九州の前期の渡来人居住集落** 北部九州の福岡市西新町遺跡は砂丘上の遺跡で、布留0式併行期から4世紀後半頃（筆者の有田IA期）の朝鮮半島系の遺物が、この時期の日本列島では珍しく大量に出る。遺跡は大きく西地区と東地区に分かれ、その間には少し地形が落ち込む。

東地区の調査面積は少ないが、4世紀代の加耶土器に特徴的な短頸壺2点と、土師質で肩に一条の暗文線が入る炉形土器が出ている。西地区では、加耶土器も一部あるが、直口で平底に小さな蒸気孔が多数あいて棒状把手がつく軟質土器甌、頸部が一度直立する軟質土器小型平底鉢や、大きな平底で把手の孔が上下に貫通する瓦質・陶質土器の短頸直口壺など、全羅道（湖南）地域で盛行する百済（馬韓）土器が主体をなす。こうした様相からみて、西新町の渡来人は、東地区が加耶系、西地区は百済（馬韓）系が主体であった。

渡来人の居住を示す資料には、ほかに竈がある。粘土で構築し、一つ掛けが基本で、嶺南地域の特色と一致するが、湖南地域の小型住居の竈も一つ掛けである。この時期の北部九州の火処は住居の中央を掘りくぼめた中央炉だから、渡来人が故地の竈を再現したといえる。本遺跡では竈と中央炉のほかに、壁際に偏った炉（偏在炉）も新たに出現する。偏在炉は、竈をもつ住居群の周りにあり、さらにその外側には中央炉の住居群があるから、在来人と渡来人が接触・交流して出現した火処である。

そうした在来人と渡来人の相互交流・影響関係は、三国土器の要素が入った擬土師器や、土師器の要素が入った擬三国土器にも現れる。擬土師器の布留式系甕には、縦貫通の有孔把手という百済（馬韓）土器の要素を持ち、内面もヘラケズリではなくナデ仕上げの分厚い例と、形態やケズリによる器壁の薄さは通常の布留式系甕だが、三国土器の要素である斜格子のタタキ目を持つ例がある、図式的には前者が渡来人による製作、後者は倭人の製作となる。擬三国土器では、直口内屈する平底の無頸壺で、右肩上がりの横平行叩き目を縦方向の細かい刷毛目で消し、胎土・焼成を含めて、つくりも形も土師器だが、底部付近外面を横ケズリして底部に小円孔を多数あけて倭人製作と考えられる甌と、土師器の技法である内面ヘラケズリを施すが、膨らんだ胴部に把手がついて口がゆるやかに直立し、平底気味の丸底に小円孔があくなど、加耶西部地域の要素が強い加耶人製作の甌がある。

こうした擬土師器や擬三国土器は、竈や偏在炉とともに倭人と百済（馬韓）人や加耶人の混住を示す。また、渡来系土器の中には忠清道（湖西）地域の土器もみられ

る。ただし、土器の量は土師器が圧倒的である。その土師器も山陰系や近畿系、北部九州系など様々で、多軸性がみられる。朝鮮半島系の土器は多くの堅穴住居から出るが、1住居では多くても数点で、渡来系だけの例はなく、渡来人はそうした西日本各地の倭人と混住した。すでに何度も述べたように、西新町遺跡は国際交流港であった。

その主な目的は本遺跡5次2号住居跡の大型板状鉄斧形の鉄素材からみて、「加耶の鉄」をめぐる交易にあった。同様な鉄素材は金官加耶の初期の首長墓（大成洞29号墳）でも出て、福岡市博多遺跡ではこうした鉄素材を切断した鉄片や大型の椀形滓、断面が蒲鉾型のフイゴの羽口が出た。

本遺跡では古墳時代前期に、列島では類のないほど多数の渡来人集団が定住し、竈が定着したが、周囲の遺跡ではこうした竈や渡来系の炊事用土器は出ない。これは規制の強さと共に、地域レベルでの生活文化定着の失敗を示す。また、本遺跡の墓地である藤崎遺跡の方形周溝墓で出た渡来系土器は、土師質の炉形土器1点のみである。渡来人の墓地は別にあった可能性や、墓には渡来系土器を副葬しない風習・規制の可能性のほかに、一定期間定住するがここで一生を終えない人々、つまり「往來する渡来人」の可能性を提起したい。

さらに、朝鮮半島の釜山市東萊貝塚や金官加耶の首都である金海鳳凰台遺跡で、布留式系甕を含む多量の土師器系土器が百済（馬韓）系土器と共に出るから、西新町遺跡は湖南地域から近畿地域までつながる金官加耶—倭政権交流の一大結節点である。本遺跡の国際交流港設定には、「加耶の鉄」の販路拡大や緊迫する朝鮮半島の政治・軍事情勢への対応を探る金官加耶の意向もあった。渡来人集落の分析は、日本列島側からだけでなく、故地の側からの視点も必要である。

また、京都府椿井大塚山古墳に百済系サルボ（田の畔に水口を切り首長権を示す鉄製の儀器）や、湖西地域で製作された分厚い弾琴台型鉄鋌を加工した大型板状鉄斧が副葬されたとする研究成果からは、百済の間接的な関わりも見えてくる。

**北部九州の中期の渡来人居住集落** 西新町遺跡は前期後半のある時点で突然なくなる。玄界灘沿岸で注目される中期の渡来人居住集落には、同じ早良平野の吉武遺跡がある。吉武遺跡の渡来系遺構は不明だが、平底鉢や甗などの炊事用軟質系土器が多数あり、渡来人の定着を示す。甗には、口縁部がゆるやかに外反し、丸底にやや大きな小孔が多数あく加耶系、単純に胴が広がり直口で、小さくなった平底にやや大きな小孔があく百済（馬韓）系、直口で丸底に縦長の孔が放射状にあく新羅系、外反口縁で胴径が大きく、大きな平底に小円孔が多数あく百済系などがある。西新町遺跡より対外交流の範囲が広がり、さまざまな地域の人々が渡来した。

吉武遺跡では軟質土器小型平底鉢の土師器化も注目される。縦平行タタキ目で底部付近の外側を削って故地のそれを忠実に再現した例から、外面に刷毛目やナデが入ってタタキ目が見えなかったり、内面をヘラケズリしたり、丸底気味の例まである。これは渡来人が定着して土師器の技法を取り入れる過程、換言すれば倭人化の過程を示す。吉武遺跡は、西新町遺跡の国際交流港を引き継いだと見られる。

火処は、福岡県塚堂遺跡D地区11号住居跡で、5世紀前半の中央炉を5世紀中ごろに壁際の竈に造り変えた例があり、西新町での炉から竈への動きが繰り返されて、今回は広く定着に成功する。

北部九州の初期須恵器窯である福岡県朝倉窯跡群は小隈・山隈・八並の3地区からなる。地域構造をみると、そこで焼かれた初期須恵器を埋葬主体部に副葬する例もあって工人を含む池ノ上・古寺墳墓群や、初期須恵器を多く保有し直線的な溝が発掘されて工人を配下に置いた首長層居宅とみられる西森田遺跡はあるが、多量の初期須恵器と共に軟質系土器を保有する工人集落自体は未発見である。最近では小隈地区の窯の横でロクロピットや粘土貯蔵穴を備えた初期須恵器工房が発掘され、初期須恵器は多いが、やはり軟質土器はない。この工房の渡来系須恵器工人は本拠地から派遣されたとみられる。池ノ上・古寺墳墓群のU字形鉄刃の多さや馬具・鍛冶具からみて、かれらは河道の切り替えなどの池溝開発や、馬の飼育・鉄器生産にも携わった。

西森田遺跡に接する本郷野開遺跡・本郷鷲塚古墳群では、5世紀後半の殉葬馬の土坑が出ており、鷲塚1号墳や3号墳は平面がL字形をなす5世後半から6世紀前半の半島系の石室である。西森田遺跡の首長層は、渡来系馬飼集団も統率したといえる。

いっぽう、朝鮮半島南部の古墳時代前期末（筆者の有田IB期末）～中期前半の土師器系土器は、金海・釜山地域の中心部である大成洞や福泉洞古墳群では、布留式土器から著しく変容した甕がほとんどである。搬入品や忠実再現品で古墳時代前期末～中期の形態をもつ土師器系土器は、慶尚南道の巨済鵝洲洞遺跡や鎮海龍院里貝塚、馬山縣洞8号・43号土壙墓、泗川勒島遺跡や、全羅南道木城里石停遺跡など、阿羅加耶や小加耶をはじめ、前期と異なった地域と遺跡に拡がり、一部は集中出土して倭人の集団的居住を示す。また須恵器は、全羅南道潭陽城山里遺跡4号住居跡でTK73期の坏身が出た。中期後半までの須恵器は湖南地域の集落を中心に拡がる。金官加耶と倭政権の交流回路崩壊後、湖南地域と日本列島との交流は加耶での新たな結節点の形成で維持された。近年の全羅南道海岸部での倭系甲冑の出土や、5世紀末～6世紀前半の湖南地域での前方後円形墳は、こうした交流基盤の上に展開すると考える。

また、研究員である星乃は、公共圏議論の延長線上に登場したアントニオ・ネグリ、マイケル・ハートが提唱した〈共〉概念をクィア史に接続する試みとして、20世紀前半ドイツ・ベルリンの生化学者M・ヒルシュフェルトおよび彼が1919年に創設した性科学研究所を考察対象とする科学研究費 基盤研究（C）「戦間期ベルリンにおける〈共〉とクィアの交錯—M.ヒルシュフェルトを中心に—」を遂行した。以下、年度ごとに区切って、そこで得られた成果について詳述する。

#### (1) 2014年度

初年度である2014年度は、①基本資料の収集、②国内アドヴァイザーとの交流を行った。①については、ヒルシュフェルト、性科学研究所、戦間期ベルリン都市史に関する基本文献の収集にあたった。②については、歴史学研究会大会近代史部会「『寛容』と嫌悪を問い直すためのクィア史」（2014年5月25日）で若手研究者のクィア史研究に触れた。同大会はクィア史を女性史・ジェンダー史・男性史の成果を摂取し、ヘテロセクシュアリティの社会関係を前提とせず、様々な領域からクィアに読み解く視座を打ち出した。重要なことは、差別を迫害・排除だけでなく、ヘテロセクシュアルによって解釈された性的マイノリティが、認知されるプロセス＝「寛容」を議論の遡上にのせた点にある。星乃はコメンテーターとして登壇し、本質主義的な解放運動の陥穽を指摘し、合わせてクィア史の意義について3点論じた。すなわち、(a)グラデーションによる性愛、(b)差別をつくり出す社会の問題、(c)性を介在させた人間関係の分析の可能性についてである。同大会への参加は、若手研究者がクィア史を自らの問題として研究していること、隣接領域の論点を積極的に摂取しており、裾野の広がりを知ることができた。また、ジェンダー史学会大会「原発とジェンダーの現代史」（同年12月14日）では、討論者として加わり、現代史研究における国家・社会の犠牲や差別のシステムと〈共〉の可能性について論じた。

これらの研究を通じて、クィア史を導入することの意義がより明確となった。それは、複雑な人間の感情や欲望、あるいはそこで形成される社会関係をクィアに読み込むことで、新たな歴史解釈の可能性を示した。また、現代史研究と〈共〉・クィアの関係性を幅広い視野のもとに獲得することができた。

#### (2) 2015年度

2015年度は、①基本資料の収集、②国内アドヴァイザーとの交流、③海外におけるネットワーク構築などを推進した。③の海外におけるネットワークはベルリンでの資料収集を数回行い、ドイツのクィア研究者との意見交換を行った。また、本年度は二つのシンポジウムに触発された。一つ目はジェンダー史大会シンポジウム「『制度』のなかのLGBT—教育・結婚・軍隊—」（2015年12月13日）で、制度とLGBTがどのような関係にある

のか、教育・結婚・軍隊を事例に明らかにした企画であった。そこではLGBTの包摂と排除が、異性愛規範を前提とするナショナリズムや軍事主義と密接に関わる点に大きな示唆を得た。二つ目は立命館大学で開催された「戦争と性暴力の比較史へ向けて—強姦、売買春から恋愛まで—」（2016年3月12日）で、性暴力に潜む自発性から強制までの連続性についての、比較史的な観点を得ることができた。両シンポジウムへ参加したことにより、次年度開催したシンポジウム構成を考える際の参考となった。

情報発信については、「『学生報告』という実験—福岡大学人文学部歴史学科西洋史学生有志の10年—」『歴史評論』（2015年5月）を発表し、福岡大学という場から「学生報告」をつくり出し、学生たちとの〈共〉の歴史像を試みた10年を論じた。

以上の研究活動をもとに、性的カテゴリーが自明ではないこと、そしてセクシュアリティ区分そのものが曖昧であることが浮き彫りとなり、加えて、ナショナリズムや軍事主義などの社会規範、社会制度とセクシュアリティの実践がどのように結びつくのかが論点となった。こうした点を解明するため、最終年度は近代社会における性の多様性と規範性を総体的に捉えるためのシンポジウムを企画した。

#### (3) 2016年度

最終年度の2016年度は、基本資料の収集・整理、国内外アドヴァイザーとの交流、適宜発信を進めると同時に、総合的なまとめの作業を開始させた。資料収集・整理については、これまで蓄積してきたヒルシュフェルトなど関連文献の翻訳作業を進めてきた。国内外アドヴァイザーとの交流については、社会学、人類学など隣接学問の専門家との交流を図るため、領域横断的な分野での研究会に参加した。また、『史学雑誌』の「回顧と展望」（2016年5月）を執筆する機会を得て、2015年度のドイツ・スイス・ネーデルラントにおける現代史研究の動向を整理した。

こうした様々な知見を得るなかで、本研究の位置を総体的に把握するため、同年12月3日に明治大学において公開シンポジウム「近代社会とセクシュアリティ—ドイツ・日本・アメリカの比較クィア史—」を開催した。そこでは、主に若手研究者に報告・コメンテーター（石井香江氏、酒井晃氏、箕輪理美氏、松原宏之氏）を依頼し、クィア史の到達点と論点整理を図った。その目的は、近代社会を性的アイデンティティのカテゴリー構築として捉えるのではなく、多様な実践と社会規範の相互作用として近代史の再考を意図した。討論では、セクシュアリティが社会にとってどのような意味付けがなされていたのか、グラデーションと異性愛規範との関係性、あるいは国家・市民・家族など社会構造との関連でクィア史を読み解くことの重要性などの論点が出され、クィア史

が女性史・ジェンダー史・男性史とは異なる視角から歴史を語り直す可能性を示した。

## 2. 研究業績

- 武末純一 2016.11.1「特集 古墳時代・渡来人の考古学集落」『季刊考古学』第137号 雄山閣 47-52頁
- 武末純一 2016.10.22「弥生時代の日韓交流」『平成28年度 東アジア国際シンポジウム 大海を渡り、一支国に至る—国境の島 壱岐・原の辻遺跡における日韓交流—』長崎県埋蔵文化財センター 29-37頁
- 武末純一 2016.9.10「弥生時代の日韓の国々(3)—弥生時代のはじまり—」『第3回古代史シンポジウム IN しものせき 古代史から国際交流を考える I 弥生時代に日韓交流(3)—資料集—』古代史シンポジウム実行委員会 2-10頁
- 武末純一 2016.8.26「原の辻の対外交渉」『特別展〈国際貿易港 靑島と原の辻〉連携学術シンポジウム 靑島と原の辻を通じて見た東アジア交流の様相』韓国国立晋州博物館 153-215頁
- 武末純一・平尾和久 2016.8.7「〈速報〉三雲・井原遺跡 番上地区出土の石硯」『古文化談叢』第76集 九州古文化研究会 1-11頁
- 三好千絵・武末純一 2016.8.7「福岡県筑前町大木遺跡の甕棺絵画」『古文化談叢』第76集 九州古文化研究会 41-56頁
- 武末純一 2016.7.25「邪馬台国時代前後の交易と文字使用」『纏向発見と邪馬台国の全貌』角川書店 144-167頁
- 武末純一 2016.5.12「タタキ技法東へ、南へ」『考古学は科学か 上 田中良之先生追悼記念論文集』415-426頁
- 武末純一 2016.3.31「日本出土の楽浪系土器概観」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 153-168頁
- 武末純一 2016.3.31「第3章 弥生時代」『筑前町史』筑前町町史編さん委員会 83-169頁
- 武末純一 2016.2.14「考古学から見た「纏向居館」」『桜井市纏向学研究センター 東京フォーラムⅣ「卑弥呼」発見「宮室、楼観、城柵、巖かに設け…」—卑弥呼の居処—』奈良県桜井市 15-23頁
- 武末純一 2015.11.14「弥生時代中国貨幣の機能・用途」『平成27年度東アジア国際シンポジウム ロード・オブ・ザ・コイン—弥生時代中国貨幣からみる交流—』長崎県埋蔵文化財センター 29-37頁
- 武末純一 2015.9.5「弥生時代の日韓の国々(2)」『第2回古代史シンポジウム IN 下関 古代史から国際交流を考える I 弥生時代に日韓交流(2) 記録集』古代史シンポジウム実行委員会 2-22頁
- 武末純一 2015.9.17「韓国の鉄関連遺跡・遺物研究の現

- 状—初期鉄器—三国時代—」『日本鉄鋼協会総合企画部門鉄鋼プレゼンス研究調査委員会「鉄の技術と歴史」研究フォーラム 第170回秋季講演大会シンポジウム論文集』1-12頁
- 武末純一・山崎頼人 2015.8.27「韓国蔚山地域の弥生系土器再論」『故孫明助先生追慕論文集 友情の考古学』531-541頁
- 武末純一 2015.4.20「3世紀の列島内外の交流とツクシ」『大集結 邪馬台国時代のクニグニ』青垣出版 115-142頁
- 武末純一 2014.8.31「弥生文化の展開と楽浪郡」『楽浪考古学概論』ジニンジン 368-404頁 (ハングル)
- 星乃治彦「2015年の歴史学界 回顧と展望—現代：ドイツ・スイス・ネーデルラント—」『史学雑誌』査読有、125編5号、2016、378-384頁(今井宏昌氏との共著)
- 星乃治彦「『学生報告』という実験—福岡大学人文学部歴史学科西洋史学生有志の10年—」『歴史評論』査読有、781号、2015、35-43頁
- 星乃治彦「同性婚時代のクィア史」『歴史学研究』査読有、924号、2014、108-110頁
- 星乃治彦「ポスト資本主義左翼=ドイツ左翼党の軌跡と課題」『季論21』査読有、26号、2014、124-133頁
- 星乃治彦、趣旨説明、公開シンポジウム「近代社会とセクシュアリティ—ドイツ・日本・アメリカの比較クィア史—」、2016年12月3日、明治大学(東京都)
- 星乃治彦、コメント、2014年度ジェンダー史学会大会シンポジウム「原発とジェンダーの現代史」、ジェンダー史学会、2014年12月14日、横浜国立大学(神奈川県)
- 星乃治彦、コメント、2014年度歴史学研究会大会近代史部会「『寛容』と嫌悪を問い直すためのクィア史」、2014年5月25日、駒澤大学(東京都)
- 星乃治彦、台頭するドイツ左翼に学ぶ、革新は生き残れるかPart5、2014年4月12日、下京いきいき市民活動センター(京都府)
- 星乃治彦、かもがわ出版、『台頭するドイツ左翼—共同と自己変革の力で—』、2014、全272頁